

平成16年9月29日

ダムWGの検討経過について

ダムWGリーダー 今本博健

1 全般的な課題

- ・事業中のダムの取扱いについては河川管理者の結論がいまだ示されていない、ダムWGはダム建設の是非についての結論をだすにいたっていない。
- ・ダムWGは次の観点からダム建設の是非を検討している。
 - 1) ダム建設の効果はあるか：ない→建設中止を提言
 - 2) 効果があるとすれば有効な代替案はあるか：ある→有力な代替案についての詳細な検討を提言 ない→ダム計画の精査およびダム建設による悪影響の改善策について検討
 - 3) 有効な代替案がある場合、代替案の実現性についても検討する必要がある。

2 機能面の検討課題

(1) 環境

- ・正常流量の確保について：正常流量を確保することは望ましいが、ダム建設の主たる目的にはなりえない。例えば、瀬切れの解消は望ましいが、ダムが建設された場合に付随的に得られる効果であって、瀬切れ解消を主目的としてダムを建設するのではない。
- ・琵琶湖の環境改善について：琵琶湖の環境改善については、琵琶湖の急速な水位低下あるいは長期的な低水位を招いている瀬田川洗堰の操作をまず検討する必要がある。

(2) 治水

- ・計画規模のあり方について検討する。とくに基本高水の問題点を明らかにする。すなわち、現在の治水計画は、過去の総雨量から河川の重要度から決められた超過確率に相当する総雨量を算定し、この総雨量になるように引伸した雨量パターン群を用いて流量群を算定し、さらにカバー率を適用して対象とする洪水流量を決めているが、「引伸し」と「カバー率」が流量を増大化している。
- ・狭窄部上流部については、既往最大洪水時の浸水被害の解消を目的として、ダムの効果について精査するとともに、代替案について検討する。
- ・ダム下流部については、ダムによる対象とする洪水のピーク流量(決め方の問題点についてはすでに指摘した)のカットの効果ならびに代替案について検討する。

(3) 利水

- ・水需要予測については、流域委員会から河川管理者に対して要請して以来3年以上経過したにもかかわらず、精査確認の結果が報告されるにいたっていない。このため、流域委員会としては「新規利水はない」と判断せざるをえない。
- ・「近年の少雨傾向」あるいは「異常渇水」については、懸念されるものの、これまでのデータの集積が不十分で、論理的な説得性をもつとはいえない。
- ・よって、利水面からみたダム建設の必要性は容認できない。